軍港見学と海軍の軍事普及活動

一

軍港見学の概要

二

軍港見学の概要

（一）軍港見学の概要

軍港見学は、軍事普及活動の一環として海軍が組織する見学活動で、一般市民にも公開されている。この見学活動は、海軍が市民に軍事機密を示し、軍事力を説明する機会である。

（二）軍港見学の概要

軍港見学の概要は、軍港での作業や訓練の様子を観察し、軍事教育の一環として行われる。また、軍港見学は、市民の生活を支援するためにも役立つ。
昭和の子どもたちの軍港見学

（二）海軍の軍事情報活動における軍港見学

さて、機動保持上、原則非公開と考えられる軍港などの施設を海軍が一般公開することについて、前出の『岩見戦第四節』では、「海軍軍事情報活動であり、同時に海軍の情報活動の一助である」と说明しています。海軍は、情報の拡散を通じて、軍力の強化を図っていることが示唆されます。現在、情報社会の特性をより一層活かし、海軍の軍事情報活動の重要性を再認識することが必要と思われます。

また、海軍は、情報の拡散を通じて、軍力の強化を図っていることが示唆されます。現在、情報社会の特性をより一層活かし、海軍の軍事情報活動の重要性を再認識することが必要と思われます。
表１ 軍港要港観覧者および軍艦観覧者数

<table>
<thead>
<tr>
<th>年</th>
<th>軍港要港観覧者数 (人)</th>
<th>軍艦観覧者数 (人)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>昭和14 (1929)</td>
<td>大正14 (1925)</td>
<td>(※1) 109,447</td>
</tr>
<tr>
<td>昭和15 (1930)</td>
<td>昭和元 (1926)</td>
<td>(※1) 155,181</td>
</tr>
<tr>
<td>昭和2 (1927)</td>
<td>昭和3 (1928)</td>
<td>—</td>
</tr>
<tr>
<td>昭和4 (1929)</td>
<td>昭和5 (1930)</td>
<td>1,230,883</td>
</tr>
<tr>
<td>昭和6 (1931)</td>
<td>昭和7 (1932)</td>
<td>963,984</td>
</tr>
<tr>
<td>昭和8 (1933)</td>
<td>昭和9 (1934)</td>
<td>778,034</td>
</tr>
<tr>
<td>昭和10 (1935)</td>
<td>昭和11 (1936)</td>
<td>869,956</td>
</tr>
<tr>
<td>昭和12 (1937)</td>
<td>昭和13 (1938)</td>
<td>693,467</td>
</tr>
<tr>
<td>昭和14 (1939)</td>
<td>昭和15 (1940)</td>
<td>2,162,763</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注：(※1) は、明治31年ごろの観覧者数である。

表2 軍港要別見学者数（昭和10年）

<table>
<thead>
<tr>
<th>軍港・要港</th>
<th>見学者数 (人)</th>
<th>比率</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>小川港</td>
<td>533,958</td>
<td>49.76%</td>
</tr>
<tr>
<td>島根港</td>
<td>78,398</td>
<td>7.23%</td>
</tr>
<tr>
<td>関西港</td>
<td>55,074</td>
<td>5.14%</td>
</tr>
<tr>
<td>横須賀港</td>
<td>8,571</td>
<td>0.77%</td>
</tr>
<tr>
<td>大湊港</td>
<td>8,565</td>
<td>0.55%</td>
</tr>
<tr>
<td>鹿児島港</td>
<td>0.52%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>長崎港</td>
<td>4,085</td>
<td>0.23%</td>
</tr>
<tr>
<td>長崎港</td>
<td>4,956</td>
<td>0.21%</td>
</tr>
<tr>
<td>鹿児島港</td>
<td>743</td>
<td>0.03%</td>
</tr>
<tr>
<td>関東港</td>
<td>1,084,618</td>
<td>100%</td>
</tr>
</tbody>
</table>

出典：『昭和十年自動車講義、映画、放送、宣伝その他実施状況一覧表』（文部省創立60年 宣伝 1939年）

備考：関東の興奮者前後は昭和14年（1939）であるため、昭和10年時点は関東港である。

内戦こつこつデビュー」との通称で、部隊長を除く多くの兵士は特に「内戦こつこつデビュー」との通称で、部隊長を除く多くの兵士は特に宣伝中の座談会や映画などの観覧を楽しみにしていた。

昭和十年（1935）1月、海軍省海軍要部及び内装の海軍要部に異議のない検討された用紙、冊子等の作成及び配布などについての観戦事実を伝えるため、海軍省は、各種学校を兼ねての海軍要部に異議のない観戦を図るものとし、部隊長を除く多くの兵士は特に宣伝中の座談会や映画などの観覧を楽しみにしていた。

昭和十年（1935）1月、海軍省海軍要部及び内装の海軍要部に異議のない検討された用紙、冊子等の作成及び配布などについての観戦事実を伝えるため、海軍省は、各種学校を兼ねての海軍要部に異議のない観戦を図るものとし、部隊長を除く多くの兵士は特に宣伝中の座談会や映画などの観覧を楽しみにしていた。
昭和の子どもたちの軍港見学

二 小中学校の軍港見学

冒頭に触れることなく、昭和八年（一九三三）十二月五日の横浜 ...

【表3】横須賀軍港見学者内訳 大正15（昭和元）年

<table>
<thead>
<tr>
<th>見学者分類</th>
<th>見学者数（人）</th>
<th>比率</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>専門学校以上ノ学生</td>
<td>1,056</td>
<td>6.68%</td>
</tr>
<tr>
<td>中学校</td>
<td>9,582</td>
<td>61.76%</td>
</tr>
<tr>
<td>師範学校</td>
<td>6,715</td>
<td>4.33%</td>
</tr>
<tr>
<td>実業学校</td>
<td>5,713</td>
<td>3.68%</td>
</tr>
<tr>
<td>高等女学校</td>
<td>8,487</td>
<td>5.46%</td>
</tr>
<tr>
<td>補習学校</td>
<td>3,534</td>
<td>2.28%</td>
</tr>
<tr>
<td>小学校生徒</td>
<td>66,336</td>
<td>42.76%</td>
</tr>
<tr>
<td>府県庁村官公吏</td>
<td>917</td>
<td>0.59%</td>
</tr>
<tr>
<td>青年団員</td>
<td>12,035</td>
<td>7.76%</td>
</tr>
<tr>
<td>青年訓練所生徒</td>
<td>966</td>
<td>0.36%</td>
</tr>
<tr>
<td>在郷軍人会員</td>
<td>10,549</td>
<td>6.80%</td>
</tr>
<tr>
<td>陸軍軍人</td>
<td>3,206</td>
<td>2.07%</td>
</tr>
<tr>
<td>現役兵員同士</td>
<td>936</td>
<td>0.80%</td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>25,571</td>
<td>16.48%</td>
</tr>
<tr>
<td>計</td>
<td>155,181</td>
<td>100%</td>
</tr>
</tbody>
</table>

出典：横須賀海軍兵士部「大正15年自一月到十二月横須賀海軍 ...

備考：『見学者分類』の名称は、上記資料表記に従った。
### 表4 明治・大正期の軍港見学小学校校団体例

<table>
<thead>
<tr>
<th>年月</th>
<th>見学者</th>
<th>団体名</th>
<th>備考・出典</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>明治4年10月</td>
<td>岸和田工学校</td>
<td>大阪府立常盤小学校5年級（修学旅行）</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>明治44年10月</td>
<td>岸和田工学校</td>
<td>萩野郡東果小学校5年級（修学旅行）</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>大正11年10月</td>
<td>岸和田工学校</td>
<td>東京市私立明小学校4年級（修学旅行）</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>大正12年10月</td>
<td>岸和田工学校</td>
<td>東京市私立明小学校4年級（修学旅行）</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>大正13年10月</td>
<td>岸和田工学校</td>
<td>東京市私立明小学校4年級（修学旅行）</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>大正14年10月</td>
<td>岸和田工学校</td>
<td>東京市私立明小学校4年級（修学旅行）</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>大正15年10月</td>
<td>岸和田工学校</td>
<td>東京市私立明小学校4年級（修学旅行）</td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>大正16年10月</td>
<td>岸和田工学校</td>
<td>東京市私立明小学校4年級（修学旅行）</td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>昭和2年10月</td>
<td>岸和田工学校</td>
<td>東京市私立明小学校4年級（修学旅行）</td>
</tr>
</tbody>
</table>

出典：『公文書類 明治四十五年 六一〜六五』、『公文書類 明治四十四年 六二〜六五』、『公文書類 大正十一年 三五〜三五』、『公文書類 昭和元年 三五〜三五』、『公文書類 昭和2年 三五〜三五』、アソシエレクストセンター（防府府庁所蔵）

### 表5 昭和期の軍港見学小学校校団体例

<table>
<thead>
<tr>
<th>年月</th>
<th>見学者</th>
<th>団体名</th>
<th>備考・出典</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>昭和15年10月</td>
<td>岸和田工学校</td>
<td>東京市公立小学校5年級（修学旅行）</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>昭和16年10月</td>
<td>岸和田工学校</td>
<td>東京市公立小学校5年級（修学旅行）</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>昭和17年10月</td>
<td>岸和田工学校</td>
<td>東京市公立小学校5年級（修学旅行）</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>昭和18年10月</td>
<td>岸和田工学校</td>
<td>東京市公立小学校5年級（修学旅行）</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>昭和19年10月</td>
<td>岸和田工学校</td>
<td>東京市公立小学校5年級（修学旅行）</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>昭和20年10月</td>
<td>岸和田工学校</td>
<td>東京市公立小学校5年級（修学旅行）</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>昭和21年10月</td>
<td>岸和田工学校</td>
<td>東京市公立小学校5年級（修学旅行）</td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>昭和22年10月</td>
<td>岸和田工学校</td>
<td>東京市公立小学校5年級（修学旅行）</td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>昭和23年10月</td>
<td>岸和田工学校</td>
<td>東京市公立小学校5年級（修学旅行）</td>
</tr>
</tbody>
</table>

出典：『公文書類 昭和15年 六一〜六五』、『公文書類 昭和16年 六二〜六五』、『公文書類 昭和17年 六二〜六五』、『公文書類 昭和18年 六二〜六五』、アソシエレクストセンター（防府府庁所蔵）

備考：本表の内の一部は、昭和期の軍港見学小学校校団体例を記載したものでない。
昭和の子どもたちの軍港見学

（一）学校の軍港見学設定意図と子どもたちの反応

学校の軍港見学を希望する場合、海軍は海軍見学を申請したのである。軍港見学を希望する場合、海軍は海軍見学を申請したのである。しかし、子どもたちの反応は一様ではなく、一部の子どもたちは興味を持って参加したが、一部の子どもたちは興味を持って参加しなかった。見学の内容は、軍港の運営や装備、海軍の訓練などを見学するもので、子どもたちは興味を持って参加したが、一部の子どもたちは興味を持って参加しなかった。

（二）東京・本村尋常小学校における軍港見学と授業との関連

表6 東京・本村尋常小学校における軍港見学と授業との関連

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>実施内容（予定）</th>
<th>国定国語教科書との関連づけ</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>覚学希望先</td>
<td>対象者</td>
<td>対象者</td>
</tr>
<tr>
<td>海軍工廠</td>
<td>海軍工廠</td>
<td>小学二年生</td>
</tr>
<tr>
<td>軍艦</td>
<td>軍艦</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>海軍航空隊</td>
<td>航空</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>海兵隊</td>
<td>海兵隊</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>軍関係人</td>
<td>軍関係人</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

出典：東京府豊多摩郡本村尋常小学校所管有文書「軍港見学許可書」（公文編号 昭和四年 縮件二 巻三 四）、アジア歴史資料センター（防衛研究所）, Ref C04010988400。
ましく浮かんでる。誰の顔を見てもほかはして我等の喜びは無限である。

誰かと呼ばれた軍艦だ軍艦だに。そこでわざと長そまるの数隻の潜航艇が列を成しているわけではないかな。空想は想像と列兵の停止と共
に消えて我が旅行団は嬉々としてプラットホームを踏み、流石は東
洋一の軍港、新戦艦場は第四ドックに多々の水兵に nieu一日一日と
完成に近づかれてある。僕は半日間の見学ではあるが到底筆で尽
すことは出来ない。唯見る人にして初めてその偉大さを知るであろう。

同校の修学旅行は約五百人規模で実施された。二日半の思いで
待ちに待たれた修学旅行をした。驚きや感動をもって我が旅行団を
見学への期待に胸を膨らませ、驚きや感動をもって我が旅行団を
軍艦や海軍事の見学への期待に胸を膨らませ、驚きや感動をもって
学するよう努めてきました。見学は四年生の木下が聞き入れの
時代と対象は異なるが、テーマパークの Forever見学の青年のも
たちのそれを変わりないように思う。

また、昭和十一年三月発行の雑誌帝国海軍と同様、昭和十一年生の木下が見学の
九月にソ連の軍を視察し、海軍での見学をし、木下の木下の
の感想文が男女各一編掲載されている。

日本最大の軍艦である。遠くから見るとまるで海の上の浮かんで
いるような山に着いた。日本最大の軍艦である。遠くから見るとまるで海の上の浮かんで
いるような山に着いた。日本最大の軍艦である。遠くから見るとまるで海の上の浮かんで
いるような山に着いた。日本最大の軍艦である。遠くから見るとまるで海の上の浮かんで
いるような山に着いた。日本最大の軍艦である。遠くから見るとまるで海の上の浮かんで
いるような山に着いた。日本最大の軍艦である。遠くから見るとまるで海の上の浮かんで
いるような山に着いた。日本最大の軍艦である。遠くから見るとまるで海の上の浮かんで
いるような山に着いた。日本最大の軍艦である。遠くから見るとまるで海の上の浮かんで
いるような山に着いた。日本最大の軍艦である。遠くから見るとまるで海の上の浮かんで
いるような山に着いた。日本最大の軍艦である。遠くから見るとまるで海の上の浮かんで
いるような山に着いた。日本最大の軍艦である。遠くから見るとまるで海の上の浮かんで
いるような山に着いた。日本最大の軍艦である。遠くから見るとまるで海の上の浮かんで
いるような山に着いた。日本最大の軍艦である。遠くから見るとまるで海の上の浮かんで
いるような山に着いた。日本最大の軍艦である。遠くから見るとまるで海の上の浮かんで
いるような山に着いた。日本最大の軍艦である。遠くから見るとまるで海の上の浮かんで
いるような山に着いた。日本最大の軍艦である。遠くから見るとまるで海の上の浮かんで
いるような山に着いた。日本最大の軍艦である。遠くから見るとまるで海の上の浮かんで
いるような山に着いた。日本最大の軍艦である。遠くから見るとまるで海の上の浮かんで
いるような山に着いた。日本最大の軍艦である。遠くから見るとまるで海の上の浮かんで
いるような山に着いた。日本最大の軍艦である。遠くから見るとまるで海の上の浮かんで
いるような山に着いた。日本最大の軍艦である。遠くから見るとまるで海の上の浮かんで
いるような山に着いた。日本最大の軍艦である。遠くから見るとまるで海の上の浮かんで
いるような山に着いた。日本最大の軍艦である。遠くから見るとまるで海の上の浮かんで
いるような山に着いた。日本最大の軍艦である。遠くから見るとまるで海の上の浮かんで
いるような山に着いた。日本最大の軍艦である。遠くから見るとまるで海の上の浮かんで
いるような山に着いた。日本最大の軍艦である。遠くから見るとまるで海の上の浮かんで
いるような山に着いた。日本最大の軍艦である。遠くから見るとまるで海の上の浮かんで
いるような山に着いた。日本最大の軍艦である。遠くから見るとまるで海の上の浮かんで
いるような山に着いた。日本最大の軍艦であ
昭和の子どもたちの軍港見学

（一）軍港見学の変容と見学禁止

軍港見学を実施できた小中学校は、地理的に軍港より遠い位置に位置
した学校であった。ただし、これらの条件に合致しない学校の子ども
たちも、海の非日常的空間に接する機会が全くなかったわけでは
ない。

昭和十年（九三〇）九月十八日、北海道小樽港へ海軍艦隊が寄港し
たことに伴い軍港見学が催され、地元の小学生百余人が見学。しか
しながらこの日は、雨が降り海が大晦天とは言えず、見学
中の中学生数名が見学中の艦内に足止めされるという事態が発生し
ている。

同年十月五日には、昭和十年度海軍大演習参加艦艇二〇隻が東
京を訪問するにあわせ、小中学生を対象とした軍港見学会が催さ
れた。計画は海軍軍事普及部が立案し、芝浦学園に発足した学生
に三日間で計六万人が訪れるという壮大なもので、見学者の範囲について
は、海上学校等選定七営壇（通称）と地元行政に委ねられていた。

昭和十三年（九〇三）以降、小中学校による軍港見学の個別記録を
確認することは困難となる。これは海軍省の公文書では昭和十二年度
までしか残存していないという資料的な制約によるところが大きい。
ただ、十三年以降、軍港見学が変容していることを伝える。

昭和十三年六月十七日付の「大討朝日新聞」では、大阪府教育監督
十回に分けて大阪府の中学生約二十五人を巻き込み、送迎に届け
軍艦潜水学校、海兵学校の見学など勤務を兼ねた軍事観察上の石
二鳥を企図した合宿形式の海軍軍事講習会を計画中である旨を伝える。相談
を受けた兵庫県府庁は「諸山をあげての大討成で具体案作成にとりかかる

（二）実地見学から「軍事教育」にも行われる

昭和十三年（九〇三）以降、小中学校による軍港見学の個別記録を
確認することは困難となる。これは海軍省の公文書では昭和十二年度
までしか残存していないという資料的な制約によるところが大きい。
ただ、十三年以降、軍港見学が変容していることを伝える。

昭和十三年六月十七日付の「大討朝日新聞」では、大阪府教育監督
十回に分けて大阪府の中学生約二十五人を巻き込み、送迎に届け
軍艦潜水学校、海兵学校の見学などを兼ねた軍事観察上の石
二鳥を企図した合宿形式の海軍軍事講習会を計画中である旨を伝える。相談
を受けた兵庫県府庁は「諸山をあげての大討成で具体案作成にとりかかる

このほか、小学校の軍事旅行でも、中国大陆で生まれ育った子どもに祖
国を見慣れる目的で実施されたものに軍港見学が組み込まれていた例
もある。昭和十二年（九三〇）五月十八日十八日、内地を訪れた天
津第一高等学校小学校六年男九〇人の一行は、五月二〇日、一
・多大な感銘を受けて軍港見学が変容していることを伝える。

昭和十三年（九〇三）以降、小中学校による軍港見学の個別記録を
確認することは困難となる。これは海軍省の公文書では昭和十二年度
までしか残存していないという資料的な制約によるところが大きい。
ただ、十三年以降、軍港見学が変容していることを伝える。

昭和十三年六月十七日付の「大討朝日新聞」では、大阪府教育監督
十回に分けて大阪府の中学生約二十五人を巻き込み、送迎に届け
軍艦潜水学校、海兵学校の見学などを兼ねた軍事観察上の石
二鳥を企図した合宿形式の海軍軍事講習会を計画中である旨を伝える。相談
を受けた兵庫県府庁は「諸山をあげての大討成で具体案作成にとりかかる

昭和の子どもたちの軍港見学

（一）軍港見学の変容と見学禁止

軍港見学を実施できた小中学校は、地理的に軍港より遠い位置に位置
した学校であった。ただし、これらの条件に合致しない学校の子ども
たちも、海の非日常的空間に接する機会が全くなかったわけでは
ない。

昭和十年（九三〇）九月十八日、北海道小樽港へ海軍艦隊が寄港し
たことに伴い軍港見学が催され、地元の小学生百余人が見学。しか
しながらこの日は、雨が降り海が大晦天とは言えず、見学
中の中学生数名が見学中の艦内に足止めされるという事態が発生し
ている。

同年十月五日には、昭和十年度海軍大演習参加艦艇二〇隻が東
京を訪問するにあわせ、小中学生を対象とした軍港見学会が催さ
れた。計画は海軍軍事普及部が立案し、芝浦学園に発足した学生
に三日間で計六万人が訪れるという壮大なもので、見学者の範囲について
は、海上学校等選定七営壇（通称）と地元行政に委ねられていた。

昭和十三年（九〇三）以降、小中学校による軍港見学の個別記録を
確認することは困難となる。これは海軍省の公文書では昭和十二年度
までしか残存していないという資料的な制約によるところが大きい。
ただ、十三年以降、軍港見学が変容していることを伝える。

昭和十三年六月十七日付の「大討朝日新聞」では、大阪府教育監督
十回に分けて大阪府の中学生約二十五人を巻き込み、送迎に届け
軍艦潜水学校、海兵学校の見学などを兼ねた軍事観察上の石
二鳥を企図した合宿形式の海軍軍事講習会を計画中である旨を伝える。相談
を受けた兵庫県府庁は「諸山をあげての大討成で具体案作成にとりかかる

昭和の子どもたちの軍港見学

（一）軍港見学の変容と見学禁止

軍港見学を実施できた小中学校は、地理的に軍港より遠い位置に位置
した学校であった。ただし、これらの条件に合致しない学校の子ども
たちも、海の非日常的空間に接する機会が全くなかったわけでは
ない。

昭和十年（九三〇）九月十八日、北海道小樽港へ海軍艦隊が寄港し
たことに伴い軍港見学が催され、地元の小学生百余人が見学。しか
しながらこの日は、雨が降り海が大晦天とは言えず、見学
中の中学生数名が見学中の艦内に足止めされるという事態が発生し
ている。

同年十月五日には、昭和十年度海軍大演習参加艦艇二〇隻が東
京を訪問するにあわせ、小中学生を対象とした軍港見学会が催さ
れた。計画は海軍軍事普及部が立案し、芝浦学園に発足した学生
に三日間で計六万人が訪れるという壮大なもので、見学者の範囲について
は、海上学校等選定七営壇（通称）と地元行政に委ねられていた。

昭和十三年（九〇三）以降、小中学校による軍港見学の個別記録を
確認することは困難となる。これは海軍省の公文書では昭和十二年度
までしか残存していないという資料的な制約によるところが大きい。
ただ、十三年以降、軍港見学が変容していることを伝える。

昭和十三年六月十七日付の「大討朝日新聞」では、大阪府教育監督
十回に分けて大阪府の中学生約二十五人を巻き込み、送迎に届け
軍艦潜水学校、海兵学校の見学などを兼ねた軍事観察上の石
二鳥を企図した合宿形式の海軍軍事講習会を計画中である旨を伝える。相談
を受けた兵庫県府庁は「諸山をあげての大討成で具体案作成にとりかかる
奇溢する子どもたちの姿を想起することはできない。

このように、「海軍三等補」など一般知識をより深く体得することを目標としていた教育及び活動の成果も着々と見られるようになった。昭和十八年（九四）以降の見学者数は資料上判断しかないとされるが、昭和十五年（九四）中学校の生徒が、のぞく教師に沿った行動を模索する中で、軍事教則の実施、講演、実習などの見学者にも用いられるものである。

昭和十四年三月、機密保持に関する規定を皮切りに、昭和十五年（九四）中学校の生徒が、のぞく教師に沿った行動を模索する中で、軍事教則の実施、講演、実習などの見学者にも用いられるものである。

昭和十四年三月、機密保持に関する規定を皮切りに、昭和十五年（九四）中学校の生徒が、のぞく教師に沿った行動を模索する中で、軍事教則の実施、講演、実習などの見学者にも用いられるものである。

昭和十四年三月、機密保持に関する規定を皮切りに、昭和十五年（九四）中学校の生徒が、のぞく教師に沿った行動を模索する中で、軍事教則の実施、講演、実習などの見学者にも用いられるものである。

昭和十四年三月、機密保持に関する規定を皮切りに、昭和十五年（九四）中学校の生徒が、のぞく教師に沿った行動を模索する中で、軍事教則の実施、講演、実習などの見学者にも用いられるものである。

昭和十四年三月、機密保持に関する規定を皮切りに、昭和十五年（九四）中学校の生徒が、のぞく教師に沿った行動を模索する中で、軍事教則の実施、講演、実習などの見学者にも用いられるものである。

昭和十四年三月、機密保持に関する規定を皮切りに、昭和十五年（九四）中学校の生徒が、のぞく教師に沿った行動を模索する中で、軍事教則の実施、講演、実習などの見学者にも用いられるものである。

昭和十四年三月、機密保持に関する規定を皮切りに、昭和十五年（九四）中学校の生徒が、のぞく教師に沿った行動を模索する中で、軍事教則の実施、講演、実習などの見学者にも用いられるものである。

昭和十四年三月、機密保持に関する規定を皮切りに、昭和十五年（九四）中学校の生徒が、のぞく教師に沿った行動を模索する中で、軍事教則の実施、講演、実習などの見学者にも用いられるものである。
昭和の子どもたちの軍港見学

1. ワシントン海軍軍縮条約の影響により、舞鶴鎮守府は大正十二年
2. 丸内港に設けられた軍港見学の体制を整備し、昭和七年（一九三二）九月に実施された軍港見学が対象範囲
3. 軍港見学の範囲は、昭和四年（一九二九）九月に舞鶴鎮守府が一部に示したもの
4. その内容は、特に軍港の施設や海軍の運搬に関するもの
5. 舞鶴鎮守府は、昭和九年（一九三四）九月に実施された軍港見学
6. その内容は、特に軍港の施設や海軍の運搬に関するもの
7. 舞鶴鎮守府は、昭和九年（一九三四）九月に実施された軍港見学
8. その内容は、特に軍港の施設や海軍の運搬に関するもの

【文献】
昭和の子どもたちの軍港見学

【注】
1. 同志社海軍学部史第二〇四〇
2. 舞鶴鎮守府史第二〇四〇
3. 舞鶴鎮守府史第二〇四〇
4. 舞鶴鎮守府史第二〇四〇
5. 舞鶴鎮守府史第二〇四〇
6. 舞鶴鎮守府史第二〇四〇
7. 舞鶴鎮守府史第二〇四〇
8. 舞鶴鎮守府史第二〇四〇